

国崎望久太郎氏著

「日本文学の古典的構造」

岡本彦一

以下は、かならずしも書評とはならぬかも知れぬ。第一、こういう概論的な、日本文学の全分野にわたるような、幅広い研究については、これを評するには、僕の視野がせますぎ、浅すぎる。却って教えられることばかりである。第二、雑誌にきまつて載っている書評というのは、本当の意味で書評らしいものはずまない。論ずる以上は本格的には論文を書かねばならぬだろう。雑誌の書評というのは内容概観、摘録紹介ならばできやすい。いや、それぐらいのことしかできぬのではない。そこで、僕は極めて自由な態度をとらせてもらつて、上掲の書物をだしにして、日本文学研究について感想めいたことを書こうと思ふ。

著者は、現代文学にふかい関心を持つている人である。短歌実作者でもある。著者にと

って現代の文学的課題が何であるかということとは、むしろ古典研究よりも切実であるのではないか。(間違つていたらごめんさい。このことは以下にも度々いいたくなるであろうが、わざわざわしいから、ここで一べんだけいって代表とする。) 著者のように大学では日本文学を研究し、また他方、創作にも生きようとする蛙にとっては、学問と創作との関係もさることながら、古典(ここでは近世以前の文学と理解してもらつてもよい)と現代文学との切れ続き、なまぬるいことばであるというなら古典との対決といいかえてもよい、の問題が重要なこととして、まず浮びあがる筈である。近代文学は、つぎ木かという問題である。それは持統でもあり断絶でもあったようだ。しかし、この間の消息は未だ明かにされたことはなかった。著者は、この問題

ととり組むのに、まことにうつつけての人である。しかし、この本は、答を示してはいない。まことに数多くの示唆にみちているが、著者もいうとおり、この問題をとく準備として作られた古典文学の一つの鳥瞰図がこの本なのであるから、答はこの本をたよりとして吾々が考えねばならぬことになっている。しかし、なまなかな答を示されて、それにとりこになつたり、反撥を感じたりするよりも楽しいではないか。著者とともに前進したいのである。それにしても、この本にほの見える概説的性格は初学者には親切な気もするが、説得力を薄めた感じになつてゐるのは残念だ。

文学を文学として研究したい、とは吾々が常々考へていることである。文献学的研究といい、訓詁注釈といい、高次のそれには文学的味解が必要であるとはいいながら、文学としての研究でないことはもとよりである。研究の前に鑑賞が先行する。この主體的享受というのが曲者である。厳重な客観性を獲得せねば学問ではない。でなくば主観の放出にとどまる。著者の鑑賞力には僕は信頼をもつてゐるし、また事実、この本の随処にその鑑賞力が示されてはいるが、僕はこの問題は文学

研究に最後までつきまづわる問題であると思ふ。文学について多くを知れば知るほど文学の正体はますますぼやけてくる、文学とはそういうものではないか。哲学が前提のない、無の深淵に臨んだ学問であるとするならば、文学は伏屋に生うる帯木の如きものであるかも知れぬ。美学と評論とに分裂して固定するというようなはめになりかねない。この本には文献学に入りこんで行こうとする姿勢はない。また、公式的な社会反映論も注意ぶかく避けられている。「国学の意義」の項など、一つの回答とみてよいであろうか。また、民俗学的見解が多く援用されているが、和歌の「勅撰集の世界」以後や、俳諧に薄いの対象による操作であろうが、方法論として統一されたものでありたいと僕は思うのである。

古典を現代にもって来て処理するか、古典のむかしに吾々が入りこんで行って味解するか。前者によれば古典はその一面をしか現わさず、後者によれば現代的課題が消えてしまふおそれがある。そこに現代的問題意識を把握しながら、古典の性格を理解してその中に入って行かねばならぬというあり方がよく

る。ここで古典の性格といったのは、それぞれの段階の文学意識の問題といつてもよい。ここで著者が提出した古典の文学意識の問題は、一つは古典の作家には獨創性・オリヂナリテイについての觀念が欠除してしたことであり、他の一つは古典文学のほとんどすべては、純粹の文学動機から表現されたものである、他の非文学的なる目的を主としていたことである。僕の勝手な要求をいえば、この本は、むしろ、この古典の文学意識の問題に限定して考察してほしかつたと思う。そうすればもっと焦点がはつきりして、真に獨創的な研究になったのではないかと思う。しかし、これは僕の身勝手な要求でありすぎるかも知れぬ。それは僕自身が、この文芸意識史ともいうべきものに最大の関心をもっているからだ。剽竊と香襲とがむしろ文学的創造の基礎であったこと、人生のための芸術、芸術のための芸術というようなことをいう以前に人生と芸術とがわかちがたく結びついて、それ全体で、そういうものであったのではないか。これを解明することは現代の文学意識で評価したり、文学と非文学とを分離してみたりして終るのではない。それぞれの段階における

文学意識の構造がそれとして解明されねばならぬのである。芭蕉には「世にふるもさらに宗祇のやどり哉」という句があり、中世には狂言締語の説とか和歌陀羅尼論とかいうものもある。そしてまた、これに似たようなことは現代文学において極めて重要な課題となっている。著者はさらに所謂ホメロス問題を出している。殊に古代文学、物語文学に於ける「原物語」である。文献学の活躍の場であるが、「原物語」の設定や、物語の成長ということも、そのそこにはやはり文学意識の問題が横たわっているわけである。文学というものが、そういうものと理解されていたればこそ成長が可能であったのである。

この本の総評らしきものを付け加えるとすれば、この本は実にいろいろな問題を提示し、その解決のために多くの示唆を示している。しかし、完全に整理されて見事な構造を示しているとはいえない。こういうかたちにおいてか、或は別なかたちにおいてか、それはともあれ、今後たびたび書き改められるべき研究であると思う。